

# 神奈川県立歴史博物館の再開館について —非リニューアルもといプチイメチェンの顛末—

神奈川県立歴史博物館 角田 拓朗

## はじめに—改修の主目的と本稿のねらい—

神奈川県立歴史博物館（以下、当館と記す）は、平成28年6月よりおよそ二ヶ年にわたる休館を経て、同30年4月28日に無事、再開を果たした。その間、神奈川県博物館協会加盟館園の多くの皆様に多大なるご高配を賜った。改めて、ここに記して厚く御礼申し上げたい。そして本稿は、その再開にかかる諸々の工夫について、神奈川県博物館協会平成30年度第1回研修会として報告した内容を基本としつつ、そこに加えてその後の展開や展望を含めて記すものである。

休館中工事の主たる目的は、老朽化した空調機器の改修にあった。平成20年度頃より顕著になったその不具合について、再三にわたり改修工事の必要性を訴えた結果、28年度から実施となった。平成28年5月末の特別展閉幕とともに休館し、以後、資料移転並びに事務所移転を実施、年末頃から本格的な施工となった。以下が、その概要である。

空調機器は、一般執務室系統、展示室系統、収蔵庫系統の3系統に分割した。特に収蔵庫は空調機に加え、CAV（定風量装置）、電気ヒーター、加湿器の複合ユニットで構成され、各吸込口にはフィルターを設置するなど、平成7年の歴史博物館開館段階よりも充実したものとなった。また増え続ける収蔵品に対応するため、館内の収蔵庫ではなかった執務スペースを簡易収蔵スペースに改め、加湿除湿ユニットを新規設置するなどの拡充も図った。

ご存じの通り、当館は重要文化財に指定される建造物を活用した博物館施設であるため、構造上、空調の安定に困難を要する箇所もある。そのため、微細な変化に即応することができるよう、館内計37カ所に温湿度センサーを設置し、その結果を示す監視モニターを中央監視室、地下荷捌き室、3階学芸部室内に設け、監視体制の強化を整えた（図1）。

以上の通り、空調機器改修工事が当初目的にあり、その予算化が図られ、実施された。その一

方で課題となったのは、二ヶ年にわたる休館があれば一般の来館者は当館が美しく改修されるのだと思っているのではないかという点だった。休館するのであれば、空調機器のみならず、他の不具合も修繕し、展示も新規更新したいという館内外の声は小さくなかった。しかしながら、まったくもってそれらに関する事業は予算化されず、展示室等の「リニューアル」は夢物語だった。しかし、工事をするために休館するのだから、展示も多少ぐらい変化するだろうという館外からの期待がひしひしと伝わり、どう対応しようかという雰囲気ばかりが館内に充満したのが平成29年の秋頃のことだった。

さて、本稿のねらいは、この主目的以外の当館の試み、あるいは「あがき」を事業担当だった筆者が記述しておくことで、加盟館園の皆様の将来の肥やしにしてもらおうというものである。つまり、昨今の経済情勢などから、老朽化する設備が更新できない館園が多く、また突然のようにリニューアルの声があがる館園もあると聞く中で、当館のささやかな工夫を示すことで参考にしていただきたいと思う次第である。

## 概説—プチイメチェンの実態—

平成30年に再開を果たしたとき、予想されたとはいえ、「リニューアル」という単語をもって新聞報道等がなされた。当館としてはあくまで「リニューアル」ではないと主張していたわけだ

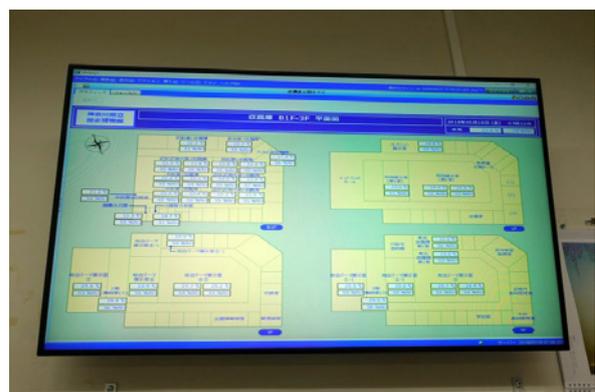


図1

が、その主張が世間的には通じるわけでもないことが事実としてあからさまになった。先述したとおり、そのような声は予想の範疇ではあって、平成29年度後半時点で再開整備にかかるわずかながらの予算措置が認められ、加えて各種執行残を寄せ集め、実施しようとなった。そのとき館内で協議され、まとまった基礎的な考え方は、以下の通りにまとめられる。

- ・ ニヶ年も休館していたのだから、少なからずリニューアルと勘違いされる。
- ・ 空調機器改修工事とはいえ、ある程度、館内の環境が改良されていないとすれば、来館者に対するサービス低下と言われても反論の余地は少ない。
- ・ 予算と時間は限られているが暫定的に実施し、再開後も継続的な改良をおこなう。

以上の理解を起点として、展示更新ではなく、来館者サービスの充実を重点として実施されたのが、後述する具体策である。まずは課題を抽出し、館内で共通認識とし、施工できる具体像を提示し、検討し、そして実施するという手順だった。学芸部に所属する筆者と当館デザイナーが中心となって素案をまとめ、予算執行を担う管理課や来館者対応を担う企画普及課などと協同しながら検討し、実施していった。結果、リニューアルではないけれども、多くの来館者に当館が変化したと感じてもらえる、「プチイメチェン」したと感じてもらえるかたちが叶った。以下、その具体策と再開後の実施状況、また残された課題を3点に分けて記す。

#### 課題と対応①正面エントランスとサイン類

来館者がすぐに変わったと感じるのは、来館した最初の場所であると筆者は考えた。つまりは、



図2

正面エントランスあるいは馬車道口玄関である。ただし、後者は重要文化財の指定部位にあたるため、より集中したのは前者となった。従来は水銀灯を使用し老朽化もあってひどく暗い印象を与えるエントランスだった。そのため改修の方向性はより明るく、混在していた案内看板サイン類の整理が課題と認識された。そこで対応された具体策は以下の通りである（図2）。

- ・ 照明のLED化
- ・ 壁面のデザイン変更＝壁紙によるアクセント
- ・ デジタルサイネージの導入

以上の諸施工により、エントランスに入った瞬間に、これまでとは異なる明るい神奈川県博という印象を強めることとなった。あわせて1階特別展示室入り口の自動ドア化や館内サイン類の見直しも進められた。

再開後の反応として好評である一方、もともと当館が抱える展示室入り口への動線のわかりづらさなどが解消されないという問題が残る。デジタルサイネージに情報を集約したが、それをつぶさに見る来館者もさほど多くなく、既存の紙による掲示を再開してしまうなどの旧来的対応も生じている。サイネージを導入するにあたり、施工業者である精美堂と十分に協議し、当館内部でこまめに更新することができるシステムとした。ただし、その運用にあたって、一部職員の負担増という事案も発生している点も現状の課題である。

#### 課題と対応②多言語化対応

博物館業界全体のホットな話題でもある多言語化対応として当館が導入したのが、スマートフォンアプリでの展示解説サービスである。当初は平成31年度以後に運用開始というもくろみだったが、大幅に前倒して、再開時の目玉事業とした。



図3

早稲田システム開発株式会社が提供するアプリ「ポケット学芸員」を活用し、およそ100項目の展示解説とそれに付属する画像を公開し、かつ県内高校の放送部に協力をあおぎ、読み上げられた音声データもあわせて公開することができた。特に高校生による読み上げは多くの反響を呼び、当初計画を大きく上回る成果だった。この工夫は夏の特別展「真明解・明治美術」でも継続実施し、改良点や使いやすさをさらに追究した。さらなる工夫として、当館内部で音入れすることになり、それがちょうど展示作業中だったこともあり、ナレーションを担当する高校生たちに来館してもらい、展示作業中ながら実際の資料や作品を筆者が解説した上で録音にのぞんでもらった(図3)。参加した高校生の反応も上々であり、新たな来館者サービスとして、加えて新たな博学連携事業、教育機会提供として根付くことが期待される。

さて、本課題の焦点はもともと多言語化対応だったわけだが、実際に再開当初実施できたのは英語のみであるという点である。30年度末までに中国語、韓国語の解説対応を目指しているが、より柔軟な多言語対応ができていくかといえば難

しい。関連した点として、アプリダウンロードのため館内Wi-Fi環境を整備した点が挙げられる。当該Wi-Fiは無料で提供するサービスであるが、当該アプリをダウンロードすることを主目的とするため、それ以外のwebサイトの閲覧等は現在制限されている点は個人的には残念である。多言語化対応が外国人観光客等を対象とするのであれば、彼らの多くが求めるフリーWi-Fiを提供するのがより適切と考えられるものの、悪質な利用等を妨げるため難しいのが実情である。セキュリティ対策も予算との兼ね合いが生じるため、事前に十分な調べとその予算化が必要であり、将来的に解決しなければならない課題である。

### 課題と対応③カラーゾーニング

展示更新はできないという基本方針は変えられないと理解しつつ、展示室内部にも改良が及ばないことには来館者の多くから不満の声があがるだろうということが、平成29年末頃に考えられていた。先に記した対応①正面エントランスLED化やサイン類の見直し、対応②スマホアプリ導入が先行して進められるなか、連動して展示室内

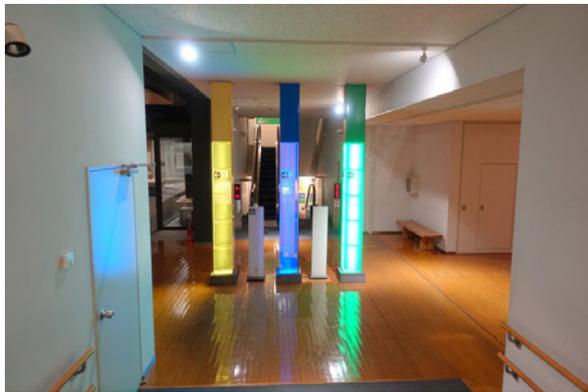


図4



図6

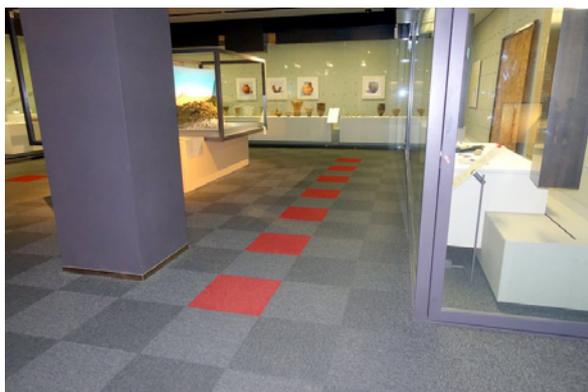


図5



図7

の「変化」が実施できないかと模索した。その結果がカラーゾーニングの導入だった。これは平成28年度の県博協研修会として小田原城リニューアルを見学させていただいたときに、当館なりに応用できないかと考えたことに端を発する。

当館は常設展示室が3階と2階に分かれ、全5テーマで構成されている。各テーマの位置や動線に難があること、人文系博物館一般に認められる「色味」の乏しい展示空間であること、そして何よりも展示室内部の雰囲気の変化をもとめ、各テーマのカラーを決定し、分けてゾーニングを実施した。具体的には展示が始まる各階踊り場部分にあった既存の各テーマを示す柱に色を付した（図4）。加えて各ゾーン内のカーペットをテーマカラーのものに変更し、動線のごとく配置した（図5）。さらに、この再開を機に改めて統一を図ったキャプションにカラーバーを加え、既存金属プレートにも同色のシールを付した（図6）。金属プレートは、先述のスマホアプリ解説とも連動しており、そのナンバーを表記してある。展示のはじまり、動線の足下、解説プレートと所要所に色を加え、館内で5色を用いて華やぎを与えることに成功したといえよう。カラーゾーニングは、各階を結ぶエスカレーターと階段の踊り場に新規設置した看板にも採用しており、館内全体の統一を図っている（図7）。特に発光する柱の印象は強烈で、実のところ、館内からも否定的な意見があった。その改良は今後図る必要はあるものの、再開＝新規改良という印象を強める効果は絶大だったことは明白である。

さらに付記しておけば、1階の導入展示室及び特別展示室内はケース内を除き、黒色の壁面で統一した（図8）。これにより、階層及び各展示テーマのカラーを大きく分けることにも成功した。展示更新は果たせないまでも、イメージ戦略として展示室内の雰囲気を変化させるという、最低限の目標を達成したといえよう。しかし、各種作り込まれたケース内パネルや展示台などとの連動は図られてはおらず、カラーゾーニングとしては未完成というしかない。資料や作品との相性や演示具への発展が可能かも深く検討する必要など、課題はつきない。

#### おわりに－反省と展望－

研修会の場でも申し上げたが、このたびの改修

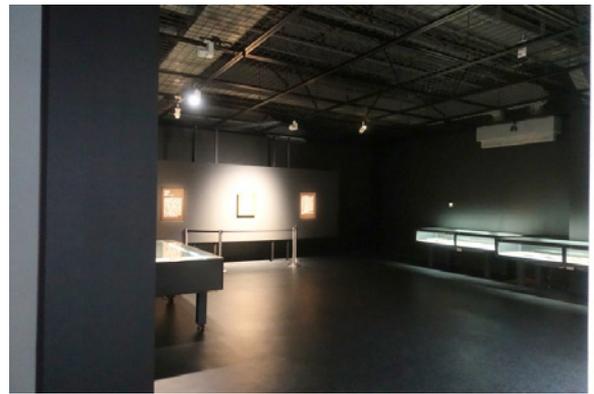


図8

工事一式は「リニューアル」という文言が通常持つイメージとはだいぶかけ離れた内容である。最低限のイメージチェンジ＝「プチイメチェン」を果たすという、土台無理な課題に挑戦したのが本稿に記した顛末である。

おおよそ理解されるとおり、半年にも満たない時間で、急場凌ぎとして実施した施工ばかりであり、計画的とは到底いえない。天井を剥がし空調機器改修工事を実施したにもかかわらず、照明更新が叶わなかった。一部改修・更新の実現を急いだため、かえって他の不備が目立つ結果ともなった。短時間での各種新規システム導入は、勢いに任せた部分も少なくなく、運用面等で未成熟なことが多い。ランニングコストについて見通しはたてられているものの、各システムの円滑な運用はまだまだ時間がかかるだろう。また、不備が多いとはいえ設備更新の多くが実現された結果、当館は近い将来、常設展示のリニューアルという大きな課題に直面することも浮き彫りになった。

以上、消極的なことを反省として記したが、総じて当館の「プチイメチェン」は成功したと理解している。制限された時間と予算のなかでは最大限にやりきったと考えている。その実現が可能だったのは、当館内部の円滑な意思決定、施工やシステム導入を実施する各企業との緊密な連携があったことを強調しておきたい。筆者は今回の一連の再開事業で、博物館は館職員ばかりでつくるのではなく、来館者の存在、施工等を実施する企業や、さらに日々ヒントを提供してくれる県博協加盟館園の協力あってと改めて強く感じた。これからも加盟館園の職員すべてが知恵を寄せ合い、直面する多くの課題に挑戦することができればよいと強く願う。